上京當座記

戸塚　星　眼　生

僕は本年四月に上京した者だ。何卒渴望せし大下先生の肉筆を拜觀の光榮に浴せんものと、取るものもとりあへず、先生の邸宅を訪問した、ガラリと入口の戸を開けたら、令夫人(?)が出で來られて先生の御留守を宣告せられた、この時一寸面喰いました、又コソ〳〵と取るものもとりあへず。引きかへして、水道町の研究所へ行つた、兼ねて寫眞版で見た、中村不折氏筆の看板がなつかしく見えた、門番サンの御許しで所内を參觀した、研究生二三人おつた、水彩畫が二點計りあつた、細い寫生には驚いた。二階へ上つたら何にも無く油繪の描きすてが一枚あつた。僕はコノ日、失望せざるを得なかつた。

大下氏は每土曜日午後なら大テイ在宅、研究所は每月第四日曜日には月次會があつて參觀を許します。

紀念號に付いてのおかしみ

伊豆佳人

僕のやうな物骨目とても水繪は握手を求めてくれる、ことに紀念號と來ては早く握手を求めたかつた。いざ紀念號を見た時の心持つたら何んなであらうと豫期して居つた如くはたしてたまらなかつた、先づ握手するや否や書齋の柱で**きみだんご**所か**こぶだんご**までこしらへて明る日學校に行て大笑れした。

次になほ滑稽があつた、或友人に紀念號を見せたら段々批評して行つた、そのとたん僕はすかしを失禮した、あつと思ふたが友は氣付きさうもない。それ迄はよかつたが、中川先生の(**グワッシ**)に來て「アハーこれがいはゆる油ゑかどうれで油くさい」と云つて原色版の臭をかひだ、僕はおかしさを包み兼ねて終に先刻油上(アブラアゲ)を食つた由を白狀した、友人は苦笑して初めて合點したらしかつた。

初夏のスケッチ

K　S　生

コバルトに少量の**プロシアンブリユー**をまぜたやうな、初夏の空白い水氣を多く含んだ雲が、ふわりと、未だ春のねむりよりさめぬやうな平尾山の上に浮んで、雲の陰か鮮かに印せられて居る。

何所となく鷄聲が聞えて、湯川の流れのさゝやきが靜かに〳〵にひびいて來る、時々ブーンと蠅がとんでくる、前の畠こい綠色をした野さいの葉に、白い蝶が二三ひら〳〵卵を產みつけてとんで行く、後の桑の木で、行々子がかまびすしく囀りだした、遠くの村よりあひ色のけむりが空にスーと流れてあたりは又元の靜けさにかへつた。(七月五日)

あゝ自然

コ　ス　モ　ス

あゝ自然！吾無心になりてなづかしき汝わがふところに抱だかれん事こそ望まれし、いざさらば吾れ浮世の名利をすて汝れが默示に從はむ。

＊　＊　＊　＊